

## ウクライナ戦争の根本問題

——戦争における真の敵は国内にいる！

阿部 治正

### 果たして国と国、西側と東側との戦争なのか？

2月24日のロシアのウクライナへの軍事侵攻に世界は釘づけになった。以来TVや新聞各社もつばらロシアの無法と蛮行を糾弾し続ける。そこまで身を落とせない評論誌は、「客観性」や「バランス」を意識してか、歴史学や地政学や安全保障論や国際法などについてうんちくを語り、両国が抱える問題点の指摘もしている。

しかしそのいずれもが、この戦争を国対国、西側と東側の衝突と見なしているという点で違いはない。多少ともマシに見える評論でさえ、この戦争の真の背景や根底については、全くと言ってよいほど語らない。

最も重要な点は、「ウクライナに自由を」「ロシアに安全保障を」と叫ばれるとき、ウクライナにおいて、ロシアにおいて誰がそう主張しているのかという事だ。つまり「誰の自由」であり、「誰の安全保障」なのか。「国民」や「国家」を僭称しつつ、自

らの特殊な狭い利己的な利益を追求し、多くの人々の生活と命を犠牲にしようとしている者はいないかという事だ。

このことに気づくことは、本来なら難しいことではない。ある程度の社会経験を積んだ大人なら誰もが思い当たる社会認識、どこの国にも存在する経済界や政界や軍隊の中で権勢をふるう勢力こそが、おのれのエゴの追求の「自由」と「安全」を強烈に欲している主体であることの理解だ。しかしそれに気づきながら、「部屋の中の象」皆が認識しているにもかかわらずあえて触れることを避けるタブー）は見ないことにするのが主流メディアの習い性なのだ。

### 両国の平時の社会経済体制はどうだったか？

ロシアの社会経済を支配しているのは、ソ連の国家資本主義の時代の国有資本を引き継いだ新興財閥、原油・天然ガスなどの自然独占を基盤にした資本家、軍需産業などの国营企業の経営層、それと結びついた

シロヴィキ（注：治安・国防関係の軍事エリート）たちだ。社会のごく一部に過ぎない勢力が、残りの圧倒的多数の人々を支配し搾取する体制だ。この体制の形成自体スムーズに実現できたわけではない。当初は西側が教示した国家資本主義から「普通の資本主義」への「改革」に挑戦し、ハイパーインフレに陥るなど混乱と辛酸を極めた。原油や天然ガスをテコにそこをやつと抜け出したロシア支配層は、だからこそこの体制をさらに盤石にしようと、またエゴも無法も世界に受け入れさせる米国を做って、旧ソ連邦領域への支配力の復活に乗り出し始めた。

ウクライナの新興資本家たちはより遅れて国家資本の横領と自らの資本形成に乗り出した。古い産業構造のままロシアの市場と資本を当てに東側に留まるか、西側による構造調整要求と引き換えの借金に依存しつつやりくりをするかの選択で揺れた。大衆も巻き込んだオレンジ革命やマイダン革命と呼ばれる陰謀と暴力が渦巻く支配層間の党派闘争に明け暮れた。その中で白人至上主義の極右が権力に接近した。そして一連のごたごたの後に「反汚職」などを撒き餌に誕生したゼレンスキー政権は、IMFやEUからの借金政策の矛盾を、さらなる西側頼みと反ロシアのナショナリズム扇動で糊塗しようとした。

2020年に英国に入れ知恵されて、日本でいう労基法も労働安全衛生法も労組法も根こそぎにし、労働者の非正規化を劇的に進めることを狙った「労働奴隷制法」を国会に提出し、この戦争のさなかに強行可決した。このことほど、ゼレンスキー政権の真の性格とウクライナ社会の真実の姿をよく示すものはない(※1 ※2)。報道ではウクライナでは国民各層が、ロシア憎しで団結しているかのようだが、この反労働者法への労働者の怒りだけを見ても、そん



「労働奴隷制法」に反対するウクライナ市民

な挙国一致が不可能であることは明白だ。ロシアの侵攻を「満州事変と同じ」と見なしてウクライナの民族的闘いを称揚する如き議論もあるが、現状を知らない者の言葉だ。両国間に力の大きな差はあるが、双方ともに独立した国民国家として立っており、ここには民族的課題はない。侵略をはねのけるための国民的課題は存在すると言えるが、それを解決できるのも労働者のイニシアチブ以外にない社会に、ウクライナはすでになっている。

※1 ウクライナの組合、反労働者的な労働法改革に反対 (<http://www.industrialjp/news/industrial/571/>)

※2 労働者に対する戦争… 戒厳令下の労働規制の何が問題か ([https://commons.com.ua/.../sho-ne-tak-iz-reguluvanyam...](https://commons.com.ua/.../sho-ne-tak-iz-reguluvanyam.../))

### 敵は国内インテリゲンシー

この戦争の本質を最も端的に示すものこそ、侵略国ロシアの国内で起きた民衆の反戦闘争だ。そこにはロシアの労働者民衆の深層部で消えずに残っていた、領土や勢力圏をめぐる戦争においては「敵は国内にいる」という思想が見て取れる。第一次大戦のさなか、交戦国の兵士たちは大胆にも司令官の命令に背いて戦場で交歓しあったが、それは兵士たちが労働者や農民であっ



逮捕された対独戦の生き残りエレナ・オシポフ

たからだ。労働者や農民は、国のため閣下のために命を投げ出せと命じる自国の支配層よりも、敵国の兵士の中に自分たちの真の仲間がいる事実を知ったのだ。労働者の先進部分は、すでに極めて明確に、戦争の勝利よりもむしろ敗北を歓迎すべきこと、自国帝国主義の敗北のるつぼの中で新しい社会の建設を目指すべきとの確信を表明していた。

ウクライナにおいても事情は同様だ。伝えられるところでは、ウクライナ労働運動に力を持つアナルコサンジカリズム系の人々は戦争動員に非協力の姿勢を示し、あるいはそれと闘っている。社会主義的傾向

を持つ労働者グループもゼレンスキー政権と闘っている。

他の欧州諸国もそうだ。欧州の労働者の左派はロシアの侵略を糾弾するとともにウクライナへの武器支援にも反対し、両国と欧州の労働者は連帯してそれぞれの国の支配層と闘おうと呼びかけている。その端的な表れが、イタリアの労働組合のウクライナへの武器輸送反対闘争であり、英国で150万人の公共サービス労働者を組織するユニゾン労働組合が打ち出した声明だ。声明は次のように述べる(※3)。

「恐ろしい状況にもかかわらず、私たちは国境を越えて労働者間の団結の構築を支持する。ウクライナとロシアの労働者は共



交戦国の労働者の連帯を訴える英国のユニゾン労組

通の利益を持つている」

「私たちは、ロシア軍を含む大規模な反戦運動の構築を支持する」

「私たちは、ウクライナの労働者がゼレンスキー政権から独立して行動し、独自の組織を構築し、独立した行動を取ることを支援する」

※3 ウクライナに関するユニゾン労働組合全国執行委員会の声明 (<https://www.stopwar.org.uk/~unison-national-executive...>)

### 労働者市民の闘いの方向

ウクライナ国旗を掲げる「平和運動」は仮にウクライナ国民への同情や義憤から出たものだとしても、容易にプーチン憎しの好戦論へと転化する危険性を孕む。平和を求める運動は、国と国、陣営と陣営の対立構図と決別し自国内の敵・世界の戦争勢力との真剣な「反戦闘争」に移っていかなくてはならない。

それは決して理念型の運動に先鋭化するという事ではない。反対に、現実社会のリアリズムに立ち返るといふ事だ。「部屋の象」から目を背けず、敵国の中にいる抑圧された仲間の存在を見、ともに連帯して闘う労働者の国際主義のリアリズムこそ重要だ。そののみが両国、両陣営の支配層の戦意を鈍らせることが出来、戦争終結の

決定的な力ともなり得る。私たちは、戦争勢力をそのままにした停戦や和平は次のより大なる戦争のための息継ぎに過ぎないと、歴史の教訓を踏まえて主張する。もちろんその前段階において戦争勢力に抵抗し、その手足を縛り、自由に行動できなくさせる課題も重視する。

この稿の最初に指摘したように、この戦争は両国間、両国民間で戦われているかに架空されているが、実際には両国、両陣営の支配層による利権や権益や労働者への支配力を争う戦いだ。だからこそ、この戦は支配層に対する被支配層の闘いに転化され、労働者市民の側の勝利によって止揚されなければ本当の終わりを迎えることはない。

各国の労働者の当面の目標は、運動がどのレベルから出発したかで、様々な形態と到達目標があり得る。マイナスから出発しての新たな団結の開始、中レベルから出発しての民衆の力量の大きな前進、比較的好調な水準から出発した国民なら政権の取り替え、そして社会経済体制の変革等々。それぞれの国や地域で可能な限りの労働者民衆側のエンパワメントの達成によって戦争を締めくくる。それが次なる闘いの橋頭堡となる。これが労働者の観点と展望だ。

(あべ・はるまさ／流山市議会議員、写真提供：筆者)